

令和8年

沖縄全戦没者追悼式



第36回「児童・生徒の平和メッセージ」図画部門 高等学校の部 最優秀賞
沖縄県立具志川高等学校2年 真鍋 朱里「繋ぐ平和」

日時：令和8年6月23日（火）午前11時50分～午後0時50分
場所：平和祈念公園（糸満市摩文仁）

沖縄県 沖縄県議会

令和8年沖縄全戦没者追悼式次第

- | | | |
|---|----------|--------------------|
| 1 | 開式の辞 | 沖縄県副知事 |
| 2 | 式辞 | 沖縄県議会議長 |
| 3 | 黙とう | |
| 4 | 追悼のことば | 沖縄県遺族連合会会長 |
| 5 | 献花 | |
| 6 | 平和宣言 | 沖縄県知事 |
| 7 | 「平和の詩」朗読 | |
| 8 | 来賓あいさつ | 内閣総理大臣、衆議院議長、参議院議長 |
| 9 | 閉式の辞 | 沖縄県副知事 |
| ◆ | | |
| 1 | 総合司会 | NHK沖縄放送局アナウンサー |
| 2 | 手話通訳 | 沖縄県身体障害者福祉協会登録手話通訳 |

式辞

本日ここに、高市早苗 内閣総理大臣をはじめ、衆参両院議長並びに御来賓の御臨席と御遺族の御列席を賜り、沖縄全戦没者追悼式が挙行されるに当たり、全ての犠牲者の御霊^{みたま}に対し、謹んで哀悼の誠^{まこと}を捧げますとともに、御遺族の皆様^{あいせき}に心から哀惜の意を表します。

戦後 80 年という大きな節目を超え、81 年目を迎えた今日、安らぎに満ちた日々を過ごす私たちにとって、あの凄惨^{せいさん}な沖縄戦は、遠い記憶へと変わりつつあります。しかし、私たちが現在享受^{きやうじゆ}している平和と豊かな暮らしは、決して当たり前ものではありません。先人たちは、激しい戦火を生き延び、焦土^{しょうど}と化した大地から、懸命な努力とたゆまぬ歩みで復興を成し遂げました。我が国が戦争をしない国として歩んできた戦後の歴史、そして、今日の沖縄県の繁栄は、その不断の努力の上に築かれ、成り立っていることを私たちは決して忘れてはなりません。先人たちが示したその強い意志と行動こそが、現在の私たちの豊かな暮らしの礎^{いしずえ}となっています。

戦争がいかに悲惨であり、決して繰り返してはならないものであるか。それは、この沖縄の地で、20 万人余の尊い命が奪われ、日常が破壊され、筆舌^{ひつぜつ}に尽くしがたい悲痛と苦しみに苛^{さいな}まれた沖縄戦の実相^{じっそう}が克明に物語っています。

しかし、現在の世界に目を向ければ、今なお悲惨な紛争や戦争が繰り返されており、平和がいかに危ういものであるかを痛感させられます。

平和は、人々の平和への願いと、それを維持するための不断の努力によってのみ紡^{つむ}がれるものです。互いの違いを認め合い、多様性を尊重し、命の尊さを重んじる社会にこそ、平和を守る真の力があります。

沖縄には、一度出会えば皆兄弟であるという「イチャリバチョーデー」の精神に代表される、人と人の出会いを大切にする心、平和に通じる文化があります。そこには他者を受け入れる心の豊かさや多様な人々が共に生きる寛容な社会の姿があります。沖縄戦を教訓とする平和への思いや出会いを大切にする文化的な営みを、私たちは子や孫に引き継ぎ、これからも守り、発信し、世界平和へ貢献してまいります。

結びに、本日、この式典への参列がかなわなかった皆様の平和への想いとともに、戦争のない世界的な恒久平和の確立に力の限り尽くすことをここに固くお誓い申し上げ、式辞といたします。

令和8年6月23日

沖縄県議会議長 中川 京貴

平和宣言

81年という年月の長さには、思いを馳^はせます。

あの日、

今と変わらず照りつける太陽の下^{した}で、

一筋の光も届かない壕の、真の暗闇の中で、

いつ止むか分からぬ砲弾の中で、

あるいは、逃げ込んだ先で罹患したマラリアの苦しみの中で、

生きることを渴望し、かなわなかった、20万を超える命。

沖縄には今も、その東西の果て、南北のすみずみに至るまで、悲劇の記憶が残されています。

今や、沖縄県民の9割以上が沖縄戦を直接に体験しない世代となりました。それでも、わたしたち沖縄県民が、地獄と言われた日々を我がことのように感じ、再びこのようなことを起こさせまいと決意を新たにできるのは、絶えることなく鎮魂と慰霊の営みを続けてきた方々、「後世のために」と子や孫へ、あるいは学校や地域で凄惨な体験を語りついだ方々、さらに、惨劇の舞台となった場所を保存し続けてきた方々の長年の努力の成果にほかなりません。

全てを失ったと言っても過言ではない81年前のあのときから、今日^{こんにち}のような美しい島々を取り戻すまでに、先人たちの懸命の努力があったことを、わたしたちは忘れてはなりません。しかしながら、沖縄には今なお広大な米軍基地が存在し、過重な基地負担と基地から派生する諸問題により人間の安全保障が脅かされる現状が続いています。特に、合意から30年が経過しても返還がなされない状況にある普天間飛行場については、一方的な押し付けではない、日米両政府と県の対話による解決を求めています。沖縄県は、一日も

早い普天間飛行場の返還をはじめ、過重な基地負担の軽減を訴え続けます。

「沖縄戦の実相にふれるたびに 戦争というものは これほど残忍で
これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです」

沖縄県平和祈念資料館には、この言葉で始まる「むすびのことば」が掲げられています。しかし、特に近年、大国の力による一方的な現状変更の試みによって国際秩序が揺らいでいる状況は、平和を希求する沖縄県民の、そして世界中の人々の願いから最もかけ離れたものだと言わざるを得ません。

戦争は、たとえ遠い国のことであっても決して対岸の火事ではありません。世界中が経済のつながりなどをいっそう緊密にしている現在、他国の軍事衝突が直接・間接に生活に深刻な影響を及ぼすことを、今、わたしたちは身をもって否応なしに経験しています。

折しも今年には核拡散防止条約の再検討会議が開催されるも、成果文書の採択には至りませんでした。核拡散への懸念が高まる状況であるからこそ、わたしたちはいっそう、平和と核廃絶を訴えてゆかねばなりません。戦争という手段を否定し、あらゆる戦争に反対し、戦争によらない課題解決を追求することにより、日本国憲法にも国民の念願とうたわれている恒久の平和と、その過程としての核廃絶を目指すことは、空虚な理想論などではなく、取り組むべき責務として求められているのです。

この摩文仁の地には、沖縄戦で命を落とした方々のお名前を、敵味方・国籍などの分け隔て無く記すことを理念とした平和の^{いしじ}礎があります。また、アジア太平洋地域の平和の構築・維持に貢献した方々を顕彰する沖縄平和賞は、今年、第13回の贈賞を行うほか、県内で平和につながる身近な社会貢献活動に取り組む方々を「ちゅうちな一草の根平和貢献賞」として表彰しています。このように、あの筆舌に尽くしがたい経験を受け継ぎ、平和のこころを広く国内外に発信しようとする沖縄だからこそ、世界平和の実現のため

に貢献していく必要があります。

沖縄県では、沖縄戦の実相・教訓とこれまでの研究の蓄積をもとに、恒久平和と人間の安全保障の確立を実現させるため、戦後100年に向けてわたしたちが進むべき方向を示したビジョンを策定します。

わたしたちは、かつてこの地で繰り広げられた出来事を次の若い世代へ責任を持って正しく伝え、平和について学び考える歩みを続けながら、世界平和の懸け橋としての役目を担い、平和創造の拠点、国際協力・貢献のための拠点として世界の中で確固たる地位を築いてまいります。

あっさ ちゆぬちゃー あた ぬちだから ぼー うちなー うふいくさ いちじぐく
数多ぬ人々ぬ 惜ら命宝 奪たる 沖縄の大戦ぬ 生き地獄や
なま んにふか きじゃ く わったー いくさ いちあわり
今ん 胸深さんかい 刻み込まとーやびーん。我々や 戦争ぬ生き哀れん
わきわきー にどう あ ふりぐとう
でいし 共有っし、二度とう 彼ぬよーな 愚行や
く けー
繰い返ちえーないびらん。
かーま くに いくさ わったーく
遠方ぬ国をうていぬ 戦争やらわん 我々暮らしにん
じゃーふえー うゆ みーぬめー
悪影響ぐとう 及ばすんでいる 現実ぬくとうんかい、
まーんまーん くに いくさ いくさやならん うふぐいー
何処其処ぬ国ぬ 戦争やていん「戦争反対」んでいち 大声っし
あ ゆがふーゆー すび
叫びらんとーないびらん。世果報世 実現なすんでいるくとうや
ただ うむいかんげー しかき すくぶん
単ぬ理想 やあらん。取組らんとーならん 責任んでいし
かたみ
背負らさつとーやびーん。
わ うちなー いくさ あわ う ち うちなー ゆがふーゆー
我した沖縄や、戦争ぬ哀り 受き継じよーる くぬ沖縄ぬどう世果報世ん
うさぎむん うむい
かいぬ 貢献やないるんでいぬ 確信かきてい、
しけー ちゆぬちゃー まじゆん むちめーしーなす
世界ぬ人々とう 共々なてい、うぬ役割果たすんでいし、
くま やくすく
此処をうてい 宣誓さびーん。

The tragic Battle of Okinawa, which claimed countless lives, remains deeply etched. We remember the misery of war, and we vow to never repeat the folly.

Given the reality that even wars far from home impact our daily lives, to oppose all wars and realize peace is no ideal but responsibility.

Having borne the scars of war, it is Okinawa that can contribute to peace, as we hereby pledge to fulfill this role together with the rest of the world.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全ての御霊^{みたま}に心から哀悼の意を表するとともに、世界の恒久平和・核廃絶に沖縄が貢献する未来を目指して、不戦を誓い、反戦を訴え、非戦の道を探求することを決意し、ここに宣言します。

令和8年（2026年）6月23日

沖縄県知事 玉城 デニー

〈しまくとぅば・英語翻訳 エッセンス〉

あまたの人々の命を奪った沖縄戦の悲劇は今も深く刻まれている。我々は戦争の悲惨さを共有し、二度と愚かな行為を繰り返してはならない。

遠い国の戦争でさえも暮らしに影響する現実に対し、あらゆる戦争に反対すること、平和を実現することは単なる理想ではなく、取り組むべき責任が求められている。

沖縄県は、戦争体験を受け継ぐ沖縄こそが平和に貢献できると信じ、世界の人々とともにその役割を果たすことをここに誓う。

生きたいと願った証

豊見城市立豊崎中学校二年 亀谷 琉奈

あの日の沖縄には
青い海も
優しい風もなかった
空は黒く
地面は揺れ
人々の叫び声が絶えなかった
爆撃の音が
心まで壊していく
まだ若かった曾祖母は
小さな体で必死に走った
血だらけの道を
倒れた人たちの横を
もう動かない人を見ながら
涙を流す暇もなく
ただ生きるために
そして
愛する夫の命を案じながら
「お願い 生きていて」
その想いだけを胸に
足がもつれても
呼吸が苦しくても
転びそうになっても
前へ前へと走った
しかし
その願いは
もう二度と届かなかった
その時のことを話す曾祖母の声は
今でもとても優しい
でも 私は知っている
その優しい声の奥に
今も消えない悲しみがあることを
細い足
しわしわの手
小さな背中
長い年月を生きてきたその姿を見るたび
私は戦争の重さを感じる
そして
曾祖母の右足には
今も傷が残っている
それは
戦時中 自分で引っ掻いた傷
灰色の空の下
爆撃の音が鳴り響く
恐怖と不安でいっぱいになり
右手に握った石で
自分の右足を何度も何度も引っ掻く
気づけば手も足も血だらけだった
私が眞実を知った時
胸が締めつけられた
どれほど怖かっただろう

どれほど苦しかっただろう
生きたい
死にたくない
その想いだけで
曾祖母は必死に生き延びた
戦争は人を傷つける
体だけじゃない
心まで壊してしまう
家族と笑う時間
友達と過ごす日々
「また明日ね」と言える幸せ
そんな当たり前を
全て奪ってしまう
でもそれは
当たり前なんかじゃない
血と涙の中を生き抜いた人たちが
命を繋いでくれたから
今の私たちがいる
もし曾祖母が
あの日 走っていなかったら
もし
あの日 命を落としていたら
私はここにいなかったら
曾祖母の右足の傷は
ただの傷じゃない
「生きたい」と強く願った証
「戦争は二度としてはいけない」
という叫び
私はその想いを
これから先も伝えていく
もう誰にも
血だらけの道を
走ってほしくないから
もう誰にも
愛する人の命が奪われることに
怯えてほしくないから
もう二度と
沖縄の空を戦争で
染めてはいけないから
平和は当たり前じゃない
たくさん人の涙と苦しみと
「生きたい」という願いの上にある
だから私は忘れない
沖縄戦で苦しんだ人たちを
愛する人を守ろうとした想いを
泣きながら生き抜いた人たちを
そして
曾祖母の右足の傷を
「生きたい」と願った証の傷を
平和な未来へと繋いでいくために

声なき声

沖縄県立那覇国際高等学校三年 東恩納 沙奈

戦後八十一年。かつて焼け野原だった沖縄の大地には草木が生い茂り、人々の笑い声がこだまする。しかし、不発弾処理や基地問題、遺骨収集の問題など、今もなおこの島に大きな傷跡を残している。私はこの現状を「性」というフィルターを通して見て、考えるようになった。

このフィルターができたのは、留学先で性被害に遭ったことがきっかけだ。散歩の帰り道、見知らぬ人から不同意でよからぬことをされた。私は何もできず、彼の機嫌を損ねないように笑顔で後退りするほかなかった。ホストファミリーは泣きじゃくる私に寄り添い共に怒ってくれた。それから被害を受けた夜になるにつれ被害妄想が激しくなり、幾度となくフラッシュバックに襲われた。数日後日本のカウンセラーと話した結果、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状が出ていると診断された。平和学習で元兵士らが今もなおPTSDの後遺症に苦しめられていることを知っていたが、こんなにも苦しいとは思わなかった。

しかし、私はいつもの明るい自分でないのが、何かに取り憑かれているようで嫌だった。「負けない。誰にも同じ思いしてほしくない。」とノートに書き殴った。これが地獄を抜け出した瞬間だった。

帰国後、性教育が今後の課題だと感じ、女性センターを訪れた際、沖縄戦と性教育に関するシンポジウムを紹介された。戦後八十年ということで沖縄が開催地となったんだそう。高校生は一人だけだったが、等身大で意見を交わすことができた。そこで紹介されたのが「軍隊を許さない行動する女性たちの会」代表の高里さんだった。彼女は米軍兵による性被害に向き合い、米軍基地の撤退を訴えてきた。私は過去の沖縄戦については学んできたが、南部で過ごすことが多いがゆえ、現在の基地問題はあまり身近ではなく、ニュースで聞いたことがある程度だった。米軍から被害を受け、戦ってきた女性の話や、どんな思いで活動してきたのかを聞いた時、これほど深刻なテーマに無関心で

あった自分が恥ずかしくなった。対話の終わり際、

「あんたの活動は応援しているよ。けどこのテーマは本当に難しいから頑張ってね。」

高齢のため一九九五年から続けてきた活動を引退するという彼女からの言葉は重い何かを託されたようだった。帰り際、高里さんと繋いでくれた方から、「あなたはやってくれる」という言葉と共にこの会の雑誌を受け取った。糸満市出身である私は、中学時代平和ガイドに挑戦したり、海外で沖縄戦を伝えたりと様々な経験を積んできた。それで満足していたことをこの雑誌を読んだ思い知らされた。そこには戦時中から今日に至るまでの事柄を性と平和に関して述べられていた。そこで初めて戦時中、日本兵や米兵からの性暴力が生後九ヶ月から九十一歳までの人に及んでいた事実を知った。それは性欲を発散させるためだけでなく、絶望感や無力感を与える武器でもあったそうだ。戦争は人を人で無くしてしまう。この言葉の意味を痛いほどに理解した。また戦後は基地ができたことにより周辺住民への被害が深刻だったそうだ。被害女性らは社会に守られることなく、強姦されたのち生まれてきた混血の子を故郷を離れて育てたり、トラウマに苦しめられたりと被害を一生背負い続けていた。一方加害者は基地に帰れば問題ないという認識や、被害者にとつて米軍であつたという情報源しかないがゆえ告発することもできず、泣き寝入りすることが多かったそうだ。この話を通して私は米軍を反対したいのではなく、日米安全保障条約や日米地位協定の在り方を国が国民の人権のために整備すべきと考えた。基地に戻れば問題ないという加害者の意識を許してしまっている時点で、これらは本当に国民のためになつていないのだろうか。民主主義に乗っ取り、県民の声を聞いていると言えのだろうか。憲法九条の平和主義に加え、第十三条の個人の尊重・幸福追求権という視点を大切にすべきと考えた。

そんな折のことだ。時雨るる空の下、私はアメリカから来た知人を連れ、平和祈念公園をガイドして周った。そこでふと平和の礎の前で立ち止まり、考えた。この名前ひとりひとりにどんな物語があるのだろうか。今の私たちに何を伝えたいのだろうか。先人たちは語りかけてくれない。

これからの沖縄の平和を担うにあたって、私は沖縄戦の影響で性被害に苦しんできた「声なき声」の代弁者になりたい。泣き寝入りした彼女たちの想いを、「性」という字に込められた「生きる」ことの意味を背負って。